

ERIANA-SITE

エリ穴遺跡

掘りだされた縄文後晩期のムラ





はじめに

松本市の東南、内田地区にあるエリ穴遺跡は、市内では数少ない縄文時代後期から晩期のムラの跡であること、土製耳飾りが数多くみつかる遺跡であることがよく知られています。

今回遺跡を含む一帯では田畠をより使いやすく作りなおす工事（ほ場整備事業）が計画され、それによつて貴重な遺跡が失われることになりました。そこで松本市教育委員会では事前に学術的な発掘調査を行い、遺跡を記録に残すことにしました。

本書は発掘調査で発見された住居跡やお墓の跡、土器、石器、耳飾りなどについての概要を記した報告書ですが、できるだけ専門用語や難しい言葉の使用を避け、図や写真を多く取り入れ読みやすい内容となるよう努めました。本書を通して多くの方々にエリ穴遺跡とはどんな遺跡か、また文化財の大切さについて理解を深めていただければ幸いです。



エリ穴遺跡の位置 (1/25,000)

▼西からみた遺跡の全景。背後の森と建物は国重要文化財の馬場家住宅。右後方より塙沢川の扇状地（せんじょううち）が広がっているのがわかる。



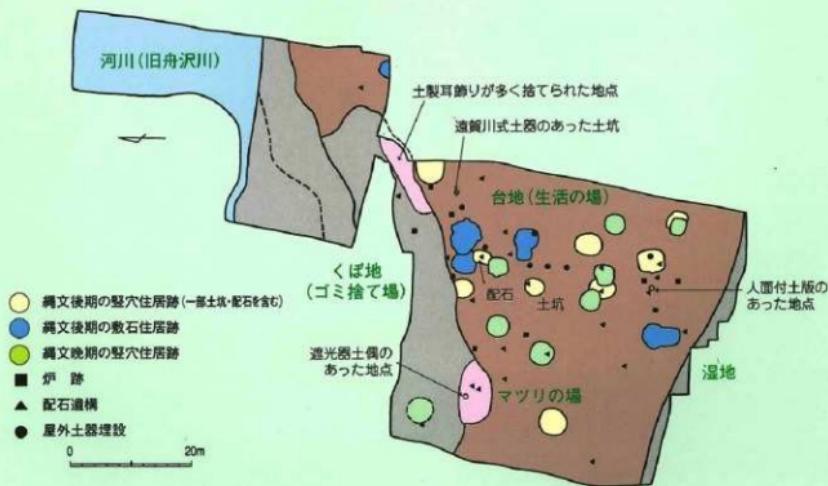
発見された遺構・遺物の概要

今回の発掘調査では縄文時代中期から晩期の住居跡、マツリの跡、各種の穴、ゴミ捨て場などからなるムラ跡の西半分を発掘するにいたりました。また土器、石器をはじめとして縄文時代の人々が使っていたさまざまな道具も多量にみつかりました。その内訳と調査の概要については以下のとおりです。

エリ穴遺跡発掘調査の概要

遺跡名	エリ穴遺跡	所在地	長野県松本市内田	コード	市町村20202・遺跡番号463
遺跡の位置	北緯36° 09' 50"・東經137° 50' 00"	調査原因	団体営業内田は場整備事業		
調査期間	19950426~19951019	調査面積	5,538m ²	遺跡の種類	集落跡
主な時代	主な遺構	主な遺物			
縄文時代中期中頃～晚期終末	穫穴(たてあな) 住居跡 中期 10軒 後期 13軒 晩期 8軒 合計 31軒 炉(ろ)跡 8ヶ所 配石(はいせき: マツリの跡) 24ヶ所 屋外土器埋設(土器を棺にした墓か) 10ヶ所 土坑(どこう: 墓、貯蔵穴など) 673ヶ所 ピット(柱穴など小さい穴) 多数 ゴミ捨て場(くば地) 1ヶ所 河川跡(かつて舟沢川が流れた跡)	土器 浅鉢(あさばち)・台付鉢(だいつばちはち)・深鉢(ふかばち)・壺(つぼ)・口(ちゅうこう)土器・異形合付土器(いけいだいつきどき)など 石器 石鏃(せきざく)・石錐(せきすい)・石錐(せきすい)・石匙(いしき)・石錘(せきすい)・浮子(うき)・打製石斧(だせいせきふ)・磨製石斧(ませいせきふ)・石皿(いしづら)・磨石(すりいし)・砥石(といし)・石棒(せきぼう)・石劍(せっけん)・石刀(せきとう)・石冠(せっかん)など 土製品 耳飾り・垂飾(すいしょく)・土偶(どぐう)・土版(どばん)・スタンプ状土製品・ミニチュア土器・有孔球状土製品(ゆうこうきゅうじょうどせいひん)など 石製品 垂飾など 自然遺物 鹿の角、動物の骨など			
平安時代	竪穴住居跡	1軒	土器・陶器	土師器(はじき)・灰釉陶器(かいゆうとうき)	
近世(江戸時代)	建物跡(竪穴・礎石建物) 土坑・ピット(柱穴など) 区画溝(屋敷跡を囲む溝)	4軒 1本	土器・陶磁器		

エリ穴遺跡 縄文時代後・晩期の主な遺構





掘りだされたムラの跡

2,000年間の人々の足跡

エリ穴遺跡では縄文時代中期から晩期（約4,500～2,300年前）の約2,000年もの間、せまい台地上の上に人々が生活を続けてきました。一度にあった住居の数は恐らく3、4軒ほど、暮らしていた人々の数もせいぜい15、16人程度の小さなムラと考えられますが、長期間にわたる暮らしの結果、住居跡や墓、マツリの跡など数多くの穴が刻まれ、すべて発掘すると地面がハチの巣のようになりました。そして住居跡や穴を覆って何千、何万個もの石が運びこまれていたのです。

台地の北にはゴミ捨て場として使われたくぼ地があり、土器や石器などの道具から、耳飾りをはじめとするアクセサリー、マツリや祈りに用いた土偶や石棒にいたるまで、おびただしい量の使われなくなったモノが捨てられていました。



▲2,000年の間に生活の場には大小数多くの石が運び込まれた。

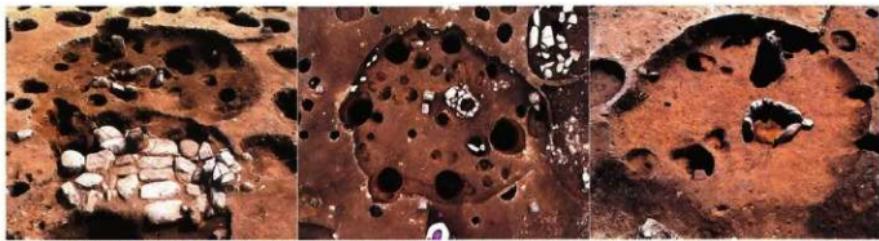
▼ほぼ発掘し終った遺跡の様子。台地の上には無数の穴が刻まれ、左側（北側）には帯状に走るくぼ地がみえる。



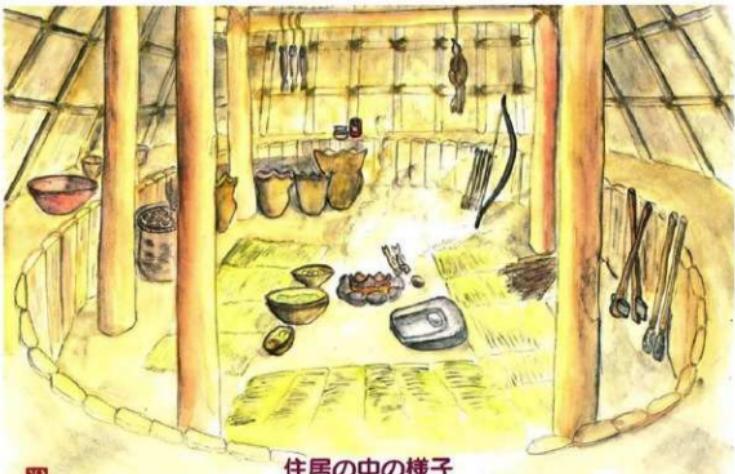
住居の跡

住居跡は31軒発見されました。これらは原始・古代の住居としては一般的な竪穴住居と呼ばれる、地面を一段掘り下げる土間のように床を作り、4、5本の柱を立て草ぶきの屋根をかぶせたもので、上からみると直径4~5mほどの円形をなしています。住居の中には石組みの炉が中央に作られ、貯蔵庫として使った穴なども時々みられます。炉の周辺には土器や石器が残されています。後期には敷石住居と呼ばれる、床に平らな石を敷いた住居も作られます。敷石住居には、柄鍍形といつて円形の住居本体に長方形の張り出し部がついたものもあります。晩期の住居跡は8軒が発掘されました。この時期の住居跡がみつかっているのは松本市内ではエリ穴遺跡だけです。ほかの時期のものと同様、石組みの円形をした炉が床の中央に、周囲には柱穴がみられます。

住居跡のほかに石組みの炉跡だけが8ヵ所でみつかり、そのうちのいくつかは住居だった可能性もあります。



▲後期の住居跡（左：柄鍍形敷石住居跡。張り出し部に敷石が残る。中：巨大な柱穴のある敷石住居跡。敷石は破壊される。右：竪穴住居跡。）



住居の中の様子

図

▼晩期の住居跡（左・中：床の中央に石組み炉のある住居跡。炉の中には土器片が残される。右：深く掘りこまれた住居跡。炉・柱穴がない。）



マツリの跡

ムラの中にはマツリが行われたと考えられる場所があります。その一つが配石遺構と呼んでいます、石を組んだり積み上げたりするもので、24カ所でみつかりました。配石遺構には大人1人かあるいは2、3人がかりでやっと持ち上げができるような大石をいくつも組んだものと、小さな石を集めたり積み上げたりするものがあり、後者の配石遺構では石の多くが火熱で焼け、時々焼けた動物の骨と一緒に出てくることもあります。恐らく石積みの上で火をたいてマツリや祈りを行ったのでしょうか。なお配石遺構ほど明確に組まれているわけではありませんが、遺跡全面に運び込まれた大小何千個もの石も信仰に関係するものと考えられます。本来はもっと整然と置かれていたものが長い年月の間にくずれてしまったかもしれません。

ムラの北側には浅いくぼ地が東西方向に走っています。くぼ地の東側はゴミ捨て場として使われていますが、西側には少し様子の違うところがあります。そこではくぼ地が南側にふくらみ、縁から底にかけて多数の石や焼けた石があり、石の間には彫刻文様で飾られた浅鉢や壺など縄文時代晩期の小型の土器が数多く置かれています。すぐ近くには遮光器土偶の頭部や石剣・石刀などの道具類も残されていました。こうした状況からみて、この場所では何らかのマツリが行われていたものと考えています。

このような目に見える形でのマツリ以外にも、家の内外では大小様々な信仰が行われたと考えられます。土偶や石棒などが数多くみつかっているのはそのためです。土偶が女性的な、また石棒が男性的な信仰に用いられるなど、マツリによって目的や意味が違うのは当然のことですが、それが具体的に何を示しているのか、現代に生きる私たちが理解するのは非常に難しいことです。

▼配石遺構（左：大きな石を組んだ例。中：小さな石を積み上げたもの。焼けた動物の骨が多くみつかった。右：小さな石を集めた例。下に穴が伴う。）



▼くぼ地の西部にあるマツリの場（左：上空から。中央の半円形に暗い部分がマツリの場。右上・右下：石の上に置かれた土器—浅鉢、小型の壺など）



お 墓

エリ穴遺跡でみつかった大多数の遺構は直径1~2mほどの筒円形や円形をした穴（土坑・ピット）です。それらの用途としてはドングリなど木の実をためておく貯蔵庫や墓が考えられます。しかしそれでは木の実や骨が残っていないため、穴の用途を決めるには非常に困難です。下に紹介する2例は穴の内部に完全な形の鉢形土器が下向きに残っており、ほかの遺跡の例から遺体に土器をかぶせた後期の墓の一種と考えられるものです。

土坑のほかに深鉢などの土器を地面に上向きに埋めたもの（屋外土器埋設）が10ヵ所でみつかりました。これも墓の一種と考えますが、残念ながら骨が出土していないため確証はありません。墓だとすると一度埋葬した遺体の骨だけを再び集めて土器に入れたか、あるいはや嬰児や乳幼児の遺体を納めた棺とも考えられます。

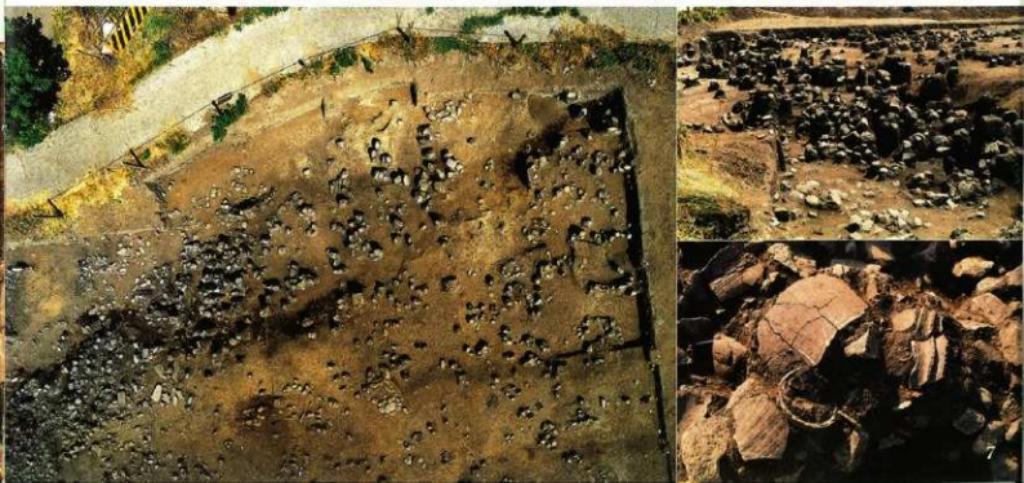
▼左・中左：墓と考えられる土坑（左：後期、底を上に向いた鉢がみえる。右：晚期の土坑。） 中右・右：屋外土器埋設（晚期。棺に使ったものか。）



ゴミ捨て場

生活の舞台となった台地の北側にはくぼ地があります。その中ほどから東側にかけてはゴミ捨て場として利用されたらしく、骨や木など生のゴミは既に腐ってなくなっていますが、おびただしい量の石や後・晚期の土器、石器、土偶や石棒など生活やマツリの道具が捨てられていました。ゴミ捨て場の東寄りのせまい範囲には多量の土製耳飾りが捨てられていました。エリ穴遺跡では2,534点の耳飾りがみつかっていますが、そのうちの3分の2はここから出土ものです。耳飾りをつけたり取り換えたりする儀礼を行ったあと、不要になったものを捨てる場所として決められていたのでしょうか。耳飾りの性格やそれをつけたりする際の儀式のあり方を考えさせます。

▼くぼ地を利用したゴミ捨て場（左：上空からみる。右端のあたりで耳飾りが多くみつかった。右上：西からみた様子。右下：捨てられた土器）



ムラの様子を再現する

発掘された遺構をもとに、縄文時代晩期のエリ穴ムラの風景を再現してみました。

ムラの南には湿地があり、塙沢川が西に流れています。ムラの北側にはゴミ捨て場やマツリの場となつたくぼ地が広がり、そのすぐ北には舟沢川が流れています。川をはさんだ北側はこの頃には原野になっていますが、エリ穴ムラが最初にできた縄文時代中期頃には一ツ家のムラが営まれていたところです。原野では盛んに狩りや木の実の採集が行われています。

ムラの中には数軒の家がみえます。かつて家が建っていた場所がくぼ地となっています。年に何回かムラの中で石棒や土偶を使ってマツリが行われ、石組み(配石遺構)が築かれました。時には周辺のムラから人々が集まり、人生の節目に耳飾りをつけたり取り換えたりする儀式が行われたようです。お墓は住居とほとんど同じ場所に作られています。

眼下に広がる松本平の向こう、西に望む北アルプスの山々や、ムラの背後にひかえる鉢伏の山に、エリ穴の人々はどんな思いをこめ、どんな名で呼び慣らしていたのでしょうか。きっと草木の成長とともに、日の出・日の入りや初雪・雪解けなど、こうした山々がみせる景色からも季節の移り変わりを読みとっていたに違いありません。



▲エリ穴遺跡から北アルプスの山々を望む。

エリ穴ムラの風景





発見されたさまざまな暮らしの道具

土器の数々

遺跡から最もたくさん発見された道具は土器です。その数はダンボール箱400個以上はあります。これは2,000年の間にエリ穴ムラで消費されたものなのです。そして住居跡やマツリの場、お墓などからは完全な形のものも多くみつかっています。

土器には用途によっていろいろな形のものがあり、後・晩期の場合煮炊き用の土器（深鉢）は簡素に、盛り付け用の鉢や貯蔵用の壺は丁寧に作られ多くは文様で飾られます。文様は縄文式土器の名前のもととなった縄目文様をはじめ、彫刻文様や粘土の貼りつけ文様など多彩です。そして時代の変化とともに形や装飾も変化しています。ちょうど現代の自動車がモデルチェンジでデザインが変わっていくのと似ています。

土器の中には北陸や関西などはるばる遠方から運ばれてきたものや、形・文様に東北地方で流行する晩期の亀ヶ岡式土器の影響がみられるものもあります。

▼左：後期の浅鉢。 中：後期の注口土器（土瓶形の器）。 右：関西地方から運び込まれた遠賀川式（おんががわしき）土器の壺（弥生時代前期）。



▼晩期の浅鉢。左端は完形品を底部からみたもの。いずれも東北地方の亀ヶ岡式土器の影響が強い。右端の破片は北陸地方に多い文様である。



▼晩期の精製された土器。左：台付き土器の脚台部分。透かし孔の周囲に彫刻文様がほどこされる。中・右：彫刻文様で飾られた小型の壺。



石で作った道具

土器となるべく数多く発見されたものに石で作った道具—石器があります。その種類もさまざまです。弓矢の先につける矢じり（石錐）、ナイフ、ドリル（石錐）、木を切ったり加工する磨製の石斧、土掘りの道具（打製の石斧）、魚採りの網につけるおもり（石錐）、木の実をつぶしたり粉をひく臼（石臼）とすりこぎ用の石（すり石）、砥石などがみられます。

石器を調べることで当時の人々が何を生業にしていたかがわかります。エリ穴遺跡では矢じりがほかの石器に比べて非常に多く、縄文時代後・晩期の人々が狩猟を主な生業にしていたことがわかります。

石器は形によって使う石も異なり、例えば矢じりなどの鋭い刃物には黒耀石のような硬質の石が使われます。こうした石器を作るための石材は地元で手に入れることのできるものもあれば、和田岬産の黒耀石のように遠方から運ばれてきたものもあります。中には下呂石という岐阜県産の石で作った矢じりもあり、広い範囲で交易が行われていたことを示しています。

▼砾石。大きなものは地面に据えて用いた。砂岩製のものが多い。



▼軽石製の浮子（うき、左端）と石錐。ともに漁労具である。

▼上・中段はさまざまな石錐。下段左2点はナイフ、右4点は石錐



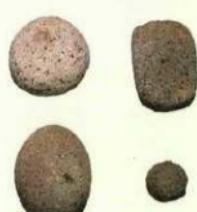
▼磨製石斧の数々。左上のものなど、実用品とは考えにくいものもある。



▼打製石斧。斧ではなく、本来は土掘りの道具として使われた。



▼石皿（左）とすり石・くぼみ石。木の実をつぶしたり、粉をひいた。



マツリの道具

■ 特殊な器

発見された土器の中にはマツリに使ったと考えられるものもあります。その一つが異形台付土器と呼ばれるもので、関東地方の後期の遺跡から多く発見されています。台座の上に小型の壺をのせた形をしています。具体的にどのように使われたのかわかりませんが、壺の側面には丸い穴があけられ、実用的な器ではないことを強調しているようです。

エリ穴遺跡のほか長野県での出土例は今のところ大田原市の大崎、一津遺跡だけです。



▲異形台付土器。口の部分を欠く。ほかにも破片が1点みつかった。

▼造光器土偶の頭部。マツリの場でみつかった。ほかにも破片多数。

■ 土偶

縄文時代を代表する信仰の道具として女性をかたどった土製の人形—土偶があります。エリ穴遺跡からは360個以上もみつかっていますが完全な形のものはほとんどなく、壊されることに意味があったようです。

土偶は時期によって形や顔の表情がさまざまで、中には仮面をかぶつたようなものや手足が省略されたものもみられます。また造光器土偶と呼ばれる、晩期の東北地方で栄えた竈ヶ岡文化に特有の土偶をまねして作ったと考えられるものもあります。

土偶は女性的なマツリ、例えば安産や植物など自然の恵みの再生を祈る儀式に使われたといわれています。



▼さまざまな土偶。主に後期に作られたもの。右端は晩期の香炉形土器に付けられた人面装飾。顔の表情が次頁の土版と似ている。



■ 土版

14点がみつかっています。土版は晩期の東日本で盛んに作られたもので、お守りとして用いられたのではないかといわれています。長方形の粘土の板の両面に彫刻文様をほどこしたものや、つり下げ用の紐かけ孔を開けたもの、赤く塗られたものなどがあります。

珍しいものとして土偶のように人の顔を表現したものが3点あります。そのうちの1点は完全な形で、顔だけでなく耳飾りや乳房、腕、腰の着衣、足や性器にいたるまで女性の全身が表現される大変珍しいものです。故意に二つに打ち割って埋められていました。

▼人面付土版の埋められていた様子（左：上から。右：横から見たところ）



▼各種の土版。右下のものは粗雑な作りの人面付土版。



▼上段左3点と中段は石棒、上段右4点と下段は石刀。

■ 石棒・石剣・石刀

石棒は男性器を表した石器で、土偶とならんで縄文文化を代表するマツリや祈りの道具として知られています。土偶の女性に対して男性的なマツリに使われたと考えられます。中期から晩期の東日本で盛んに作られ、後・晩期には刀や剣のような形をした石刀や石剣も現れます。またこの時期にはち密な石を使ったり彫刻がほどこされるなど、作りが精巧になります。

エリ穴遺跡では石棒・石剣・石刀あわせて170点もみつかっています。石刀の中には当地方ではめずらしい、東北から北海道に多い形のものが1点あります。



▼石冠。片側が刃になっているが、石材はやわらかい。

■ 石冠

縄文時代後・晩期には用途のよくわからない石器がたくさんあります。石冠もその一つで、片側が斧の刃のようになっていますが実用品とは考えにくいものです。恐らく信仰の道具として使われたのだろうといわれていますが、具体的にどのように用いられたのか不明です。中部地方でよく発見されるようです。



縄文のアクセサリー

■ 土製耳飾り

今回の発掘で2,534点もみつかり全国でも屈指の量となりました。耳飾りは縄文時代のアクセサリーの一種で、後期から晩期に発達します。

形は臼形、リング形を主に、ブリッジのついた手のこんだものもみられます。臼形とリング形には文様で飾るものと無文のものとがあり、臼形には雑な作りのものもあります。ブリッジのあるものは極めて精巧に作られ、繊細な彫刻文様で飾られます。大きさは直徑5mmほどのものから5.6cmのものを主に10cmを超す大型品まであります。

耳飾りはピアスとして耳たぶに穴をあけ、はめこんで使いますが、最初は小さいものから始めて成長とともに次第に大きなものに取り換えていったようです。またつける人の性別や既婚や未婚などの性格の違いによってつける種類が決まっていたのでしょうか。あるいはマツリや儀式のときとふだんでもつける種類を変えたかもしれません。耳飾りから縄文時代の身分階層を見出だそうとする研究もあり、多様な耳飾りが何を物語るのか、解明はこれからです。



▲各種の土製耳飾り。特に精巧な作りのものを集成した。

▼多種多様な土製耳飾り。形の違い、文様の有無、大きさ、精粗など、千差万別である。朱で塗られたものも多い。



■ ペンダント

耳飾りに次いでよくみられるアクセサリーにペンダント（垂飾）があります。形や大きさ、素材がさまざま、いろいろな用い方があったのかもしれません。ペンダントには透かし彫りや彫刻などの文様が施されたものや赤く塗られたものがあります。土製や石製の勾玉形のペンダントもあります。石製のものは非常に硬質なヒスイが使われています。ヒスイは新潟県の姫川流域（糸魚川市周辺）で産出し交易で各地にもたらされたもので、コハクとともに縄文時代の宝石の代表格といえます。こうしたアクセサリーはマツリや儀式などハレの日に身につけたのでしょう。またムラの長老や司祭者など特別の立場の人にだけ着用が許されたものもあると考えられます。

▼各種の垂飾。上段左3点は土製、他は石製。下段は勾玉類で、中央と右端のものはヒスイ製。上段右から2番目のものは髪飾りの可能性もある。



そのほかの道具

これまで紹介してきたもののほかにもさまざまな種類の道具がみつかっています。右に紹介する有孔球状土製品もその一つで、粘土で作った塊に孔があけられています。文様で飾られる糸巻き形のものや文様のない球形やラグビーボール形のものがあり、いずれも孔はまっすぐに貫いています。

有孔球状土製品の用途はいまだによくわかつていません。孔に軸棒を通して、糸つむぎの筋縫車のはずみ車として用いたのでは、といわれています。また一説では、ヒスイの原産地である北陸地方に発見例が多いことから、ヒスイに孔をあけるためのドリルのはずみ車としても使われたのではないかともいわれています。

▼有孔球状土製品。文様で飾られたものも多い。





エリ穴遺跡の周辺

エリ穴遺跡の周辺には数多くの遺跡や文化財があります。例えば塩沢川の流域には小池、一ツ家、雨堀、清心などの遺跡があり、これまでの発掘調査の結果から縄文、奈良・平安、鎌倉・室町・安土桃山の各時代にこの地が栄えたことがわかっています。遺跡は現在は宅地や田畠になっていますが、出土品は松本市立考古博物館（〒390 松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710）に収蔵・展示されています。

エリ穴遺跡の東隣には国重要文化財の馬場家住宅があります。江戸時代の豪農の屋敷としてその景観を今に伝えています。平成9年4月から一般に公開されます（〒399 松本市内田357-6 TEL 0263-85-5070）。遺跡や考古博物館とあわせて見学してみてはいかがでしょうか。



▲左・中左：雨堀遺跡の住居跡群と動物の装飾のある縄文時代中期の土器。中右：清心遺跡の縄文時代前期の住居跡。右：国重要文化財馬場家住宅



▼左・中左:小池遺跡の全景と縄文時代中期の住居跡。中右・右:一ツ家遺跡の全景と縄文時代中期の土器のみつかった様子。





参考資料 ~エリ穴の頃の日本~

エリ穴遺跡を中心とした縄文時代の年表

西暦	時代	西暦	特徴	できごと	エリ穴遺跡の動き
BC10000	旧石器	BC10000	新石器	○土器の製作はじまる。 ○弓矢、石器の発明。	
BC300	縄文 弥生	BC7000	新石器	○関東地方で過労が盛んになる、貝殻が作られる。 ○尖底の土器が作られる。 ○竪穴住居が出現する。 ○定住生活が開始される。	
AD300	古墳	BC4000	新石器	○気候が温暖化する。 ○平底の土器が作られる。 ○阿久遺跡(御跡郡原村)に環状の大きなムラが作られる。	
AD710	奈良	BC3000	中石器	○東日本を中心に人口増加する。 ○ハサ岳や浅間山麓など各地に大きなムラが現れる。 ○土偶に立体的な装飾が登場。 ○石鎌が減少し打製石斧が多く使われる。	○中頃に最初のムラが営まれる。 ○近隣にツーリー家や小池のムラが構えられる。 ○終わり頃にムラが衰退する。
AD794	平安	BC2000	新石器	○気候が寒冷化し、人口減少する。 ○中部・関東地方で敷石住居が作られる。 ○土偶・石棒などマツリの道具が増加する。 ○中部・東海地方で発掘的に石旗が増加する。	○中頃に再びムラの形成が始まる。 ○各種の土偶が盛んに作られる。 ○後半にムラが繁榮する。 ○終わり頃にゴミ捨て場が形成される。
AD1192	鎌倉	BC1000	後	○東日本で土製耳飾りが盛んに作られる。 ○東北地方で亀ヶ岡文化、関東地方で安行文化が栄える。 ○北九州に稻作が伝来し、遠賀川式土器(弥生式土器)とともに東へと伝わってゆく。	○耳飾りが多量に使用される。 ○亀ヶ岡文化や安行文化の影響を受ける。 ○中頃にはムラが衰退する。 ○終わり頃に再び生活の舞台となり、西日本から遠賀川式土器がもたらされる。
AD1338	室町	BC300	新		
AD1568	安土桃山				
AD1603	江戸				
AD1868	明治				
AD1911	大正				
AD1925	昭和				
AD1989	平成				

エリ穴の頃の日本～縄文晩期前半～



縄文時代晩期の日本は東西で生活・文化が大きく異なっていました。その違いは土器に端的に表れ、西日本では突堤文(とったいもん)土器と呼ばれる簡素な土器が、東日本では縄文や彫刻的な文様で飾られた土器が盛んに作られました。さらに東日本では東北地方に追光器(しゃこうき)土偶などに特徴づけられる亀ヶ岡(かめがおか)文化圏が、関東地方には安行(あんぎょう)文化圏が成立し、互いに影響を与えて独自の文化を築きました。

当時の長野県はこれらの文化圏の接点にあたる地域といえます。

